

「話すこと」における言語運用能力の流暢さと正確さを向上させる指導
～Time Decreasing Writing とケーススタディを通して～

福島県立福島東高等学校 教諭 クームズ 茂子

1 研究の趣旨

社会の急速なグローバル化の進展に伴い、それに対応できる英語力の育成が求められており、言語運用能力を育成することが喫緊の課題である。また、学習指導要領改訂に向けた論点整理では教科の目標として4技能の基礎的な能力とその向上を挙げており、英語話者が理解できる程度の英語、つまりある程度の正確さが流暢さに加えて求められている。そこで、本研究では「話すこと」における言語運用能力の流暢さと正確さを育成する実践的な指導法を確立したいと考えた。

「話すこと」を困難にしている要因の一つに、人間には一度に処理できる情報量に限界があるという「容量の限界」と定義される考えがあげられる。つまり、その限界を超えたところまで注意を向けることができないため、外国語を話そうとするときに、意味を伝えることに集中して文法的また音声的な正確さまで注意を払えなかったり、逆に正確さに気を遣うあまりに内容が疎かになってしまうなどの現象が生じる。こうした「話すこと」を困難にしている要因の解決策を講じることで、言語運用能力を育成できると考えた。そこで、制限時間を設けたライティング活動、「Time Decreasing Writing (以下、TDW)」と英語話者のモデルを用いたケーススタディを活用することで、学習者の心理的な負担を軽減し、言語運用能力の正確さと流暢さを同時に向上させることができると考え、本研究主題を設定した。

継続的にTime Decreasing Writingやケーススタディを取り入れることで、「話すこと」における言語運用能力の流暢さや正確さを向上させることができるであろう。

2 研究の概要

英語表現Ⅱの授業において、各単元に3時間を充て、最後の1時間をその単元のまとめとしてTDWとケーススタディを取り入れたスピーキング活動を実施した。

(1) Time Decreasing Writing

TDWとは話す前に制限時間を設定して、ライティングを行い、徐々にその制限時間を減らしていく活動である。回数を重ねるごとに制限時間が短くなることでアウトプットの処理スピードを伸ばすことができ、継続的に行うことで、最終的には即興で自分の考えを伝えられることを目指した活動である。

(2) ケーススタディ

ケーススタディとは、英語話者によるモデルを利用した活動である。あるテーマについて発話した後、英語話者による発話モデルを提示する。ケーススタディを発話の後に活用することで、自ら自己のアウトプットと比較しようとする主体的な学習意欲を促進でき、語彙や文法だけでなく音声的な視点からも振り返ることで、言語運用能力の正確さの向上を図る活動である。

(3) 検証方法

授業実践の前後でそれぞれ異なるテーマについて、生徒68名の発話をタブレットに録画し、その発話を書き起こしたデータを用いて発話の変容を分析した。また、「流暢さ」と「正確さ」の観点から分析し、具体的な検証項目はEllis & Barkhuizen (2005)を参考に設定した。また、参考資料として実践の前後において、英語学習や話すことについての意識調査を実施した。

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

授業を通して、「話すこと」における言語運用能力の流暢さが向上し、スピーキング力の育成に役立つ結果が得られた。英語を使用する機会を継続的に設けることで発話に慣れ、TDWの活用によって英語の処理スピードが伸び、スピーキング力の向上に繋がったと考えられる。

(2) 今後の課題

実践前は伝える内容も英語も咄嗟に思い浮かばず、ほとんど何も言えなかった生徒が、実践後には発話するようになった一方で、ライティングを活用することが弊害になりうる場合も見られた。紙上ディベートを行った際、「文法や綴りに自信がもてなかった」と感想として記述した生徒もあり、語彙や文法の正確さを意識するあまり、発話するよりも書くことの方に負荷を感じる生徒がいることが分かる。生徒の能力に応じた言語活動の取り入れ方の工夫に努め、多岐にわたる内容について即時的に自分の考えを適切な表現で伝えられるよう、言語運用能力の育成に努めたい。